囲碁る！

はうす

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
囲碁る！

【Ｎコード】
Ｎ２８８７Ｒ

【作者名】
はうす

【あらすじ】
一人称系の転生ものです。

申し訳ありませんが、更新を停止します。日常が非日常になってしまいました。感想をくれた皆さん、こんな若輩者のために小説の書き方をご教授くださった皆さん、本当に申し訳ありません。
おそらくもう更新はしないと思いますが、取り合えず残しておきます。
今まで、ありがとうございました。

プロローグ1（前書き）

懐かしいでしょう。
最近、“三月のライオン”を読んだらハマったのです。
なら、将棋だろ、と思った方も居るかもしれませんが、あえて此方にします。

プロローグ1

死んだ。

物凄く死んだ。言っておくが、回数の話ではなく、特別な死に方をしたのだ。

最近、東京を騒がせている狙撃手に撃たれたのだ。

その狙撃手は、ランダムに標的を決め、通常では考えられない距離での狙撃を成功させている。

何故、距離がわかるかというと、空薬莢を現場に残していくらしいのだ。

その異常なまでの狙撃の腕前と、神出鬼没な行動にマスコミは騒ぎ立てた。

ある意味面白いことだが、外出する人の数が減ったらしい。

確率的に言うと、自動車事故のほうが圧倒的に高く、狙撃される確率は、何十万分の一にもかかわらず。

そう思って、外出しようとした。

そう、しようとしたんだが、玄関を開けた瞬間に意識がなくなった。

どうやら、狙撃されたらしい。

見事にヘッド・ショットだった。即死だ。流石、凄腕スナイパー。

プロローグ2

どうも、先ほど死んだ人です。

なんか、神様が生き返らせてくれるそうです。

マンガの世界に。

テンプレ（？）って奴かと思ったが違うらしい。

曰く、神がミスなんてするはずがない。ミスをしないからこそ神である。

神が自分で名乗ったり、土下座したりするはずもなく、説明口調で主人公が神について“あの北欧神話の・・・”なんて説明しない。

っていうか、アレ、作者も知らねぇだろ。Ｗｉｋｉってんじゃねーよ。

ということで、別に神は適当に選んだだけらしい。

頭部があまりにもグチャグチャで面白かったからだそうだ。

で、どの世界かというと、「ヒカルの碁」らしい。

読んでねーよ。

碁に興味もないし。

どうも神の一手に辿り着く者がいないらしく（当たり前だが）、面白くないらしい。

そして、僕は、神の一手に人間が近づくスピードの加速度を上げる役目を負うらしい。

「らしい」ばかりだが、実際に神に聞いただけなので、「らしい」というのが精一杯だ。

棋力としては、十代からかなり強く、十代後半にもタイトルを取れて、六十代には、神の一手を極めかけるらしい。

極めることはできないようだ。

なんか嫌だなぁ。

「さっさと、行け。」

送り出されました。

片桐トウヤについて

片桐トウヤ

中肉中背。髪も目も黒。純日本人であり、そこら辺にいるレベルの顔。

運動がいいわけでもなく、勉強がいいわけでもない。

休むと、同じクラスの男子からは、「休みだっけ？」と言われる。

ただ、大人っぽい雰囲気を醸し出しているためか、年上に見られ、背伸びしたい年頃な女の子にモテる。

棋力は、神曰く

「十代後半にも、タイトルを狙える

最終的には、神の一手を極めかける」

とのこと。

好きな食べ物は、ナタデココ。

嫌いな食べ物は、みつまめ。

師匠は、坂口九段。

和歌山県出身だが、父の栄転で東京へ。

進藤家の近くに住んでいる。

第一話　1

片桐（かたぎり）家に生まれました。長男です。

ヒカルの碁は、東京が舞台だって聞いたのに、何故か和歌山県生まれです。

普通の家庭で、普通の両親という環境で育った僕が、初めて碁石に触ったのが六歳のときでした。

はっきり言うと、碁は日本で生活していてあまり触れる機会のないものだと思います。

事実、競技人口は減り、世界的に日本のレベルは低下の一途をたどっています。

そんな中、近所の老人ホームのおじいさんが、やっていたのを見てやりたくなったのです。

ルールブックを買い、覚えようとしたところ、五分も掛からずに覚え、まとめて買った本に載っていた定石は、一日でマスターしました。

神のせいです。

そして、小学校のボランティアでその老人ホームに行ったとき、師匠に会ったのでした。

「なんや、坊主。
打てるんか？」
榧製の見るからに高そうな碁盤を机に載せた老人がこっちを見ていました。
「ルールは知ってる。けど、人と打ったことない。」
「おっしゃ、じゃあ、ワイが打ったろ。」
それが、初めての碁で、師匠との出会い。
「とりあえず、九子置くか。」
そう言って、始まりましたが、その日のうちに一子逆番になりました。
実はこの爺さん、坂口さんは、十年ほど前までは関西棋院にいたプロの棋士だったそうで、やたら強いんです。
「お前、かなり才能あるで。
どうや、週に三日ほど来て、勉強せぇへんか？」
「いいん？」
いくら、老人ホームでもそんなに来ていいものなのだろうか。

「かまへん、かまへん。
むしろ来い。
此処の爺さんら、あんま強ないねん。ワイのええ暇つぶしになる。」
「じゃあ、月水金と場合によっては土日も。」
「おう。」

次の金曜日。

個室のお爺さんを訪ねると、なんかいっぱい居ます。

「この子が坂口先生の言うとった子ぉかい。」
「そうや。」
「まだ、だいぶ小っさいで?」
「そう言えば、お前何歳やったっけ?」

坂口さんには、一度言ったはずなんですけど。きっと、名前も忘れてる。

「片桐トウヤ、六歳です。」
「うちのと同じかいな。」
「うちの孫らよう打たんけどな。」
と周りのお爺さんは、言いますが、

「そいつは、きっと碁の神さんに愛されとる。」

と坂口さんが言うのです。

「打ってみてぇな。」

と周りのお爺さんが、薦めるので、坂口さんと碁を始めました。

その日の最後の検討の後、次からは互先だと言われました。

第一話　2（前書き）

中途半端なところで、切ってしまってすいません。

まだ、過去の話は続きます。

第一話　2

知り合ってから、一年たった頃。

坂口さんは、師匠と呼ぶとかなり元気になります。

なので、そう呼ぶことにしました。

「師匠、秀策が好きなんわ分かったから、打とうや。」

「アホか、この美しさがわからへんのか！

虎次郎わなぁ、史上最強の打ち手や。そんな棋士を勉強せんで、何の勉強をすんねん。

囲碁は、ずっと勉強や。えんえんと、長く、狭い、ガタガタの道を一生走り続けなあかんねん。」

「・・・はい。」

師匠は、秀策のことを虎次郎と呼ぶ。

知ったかぶりではないようだ。何故なら、秀策の棋譜なら全て諳んずることができるのだ。

ちなみに、なんでこんな状況なのかというと、ついさっきに話はもどる。

うっかり、師匠の前で「最強の棋士は、誰か」という質問をしてし

まったからだ。

今、師匠が秀策の棋譜を、実際に、盤に再現している。

「おい、何でココに打ったんだと思う？

誰がどう見たって、悪手やろ。」

確かに、どう見たって悪手。

「うーーん。

あと五十三手で中央からぶった切れるからちゃうか？

左上をうまく押さえきったら、その石が、機能しだすやろ。」

左上は死んでいるように見えるだけで、たった一筋だが、巻き返す道が残ってる。

秀策が、見落とすとは考えられない。

「ふむ、不真面目そうにみえて、しっかり勉強しとるってことか。」

学校の休み時間もやってます。

「ええ師匠をもっとるさかいな。」

「はっ、思ってもないことを。

まぁ、とりあえず、打つか。」

「はい、師匠。」

「・・・・経験差か。」

負けたさ、惨敗だよ！

「そうやろな。

勝ちに対する粘りって言うんかなぁ、勝負強さ？

勝負の世界の強さ。まぁ、一朝一夕で付いてきたら、それこそソイツは、鬼か天狗か、人ではないやろ。

たまに忘れそうになるけど、お前、まだ七歳やし。」

師匠は、もう長くないらしい。

医学的には。

ただ、驚異的な生命力で耐え抜いている。

先ほどまでの気迫も恐ろしいものだった。

全身に針が刺さったような感覚。

一手一手が、まるで殴られているような感覚。

やはり、僕は、いい師匠を持った。

「夏休みになったら、ここだけじゃなく、碁会所にいくか。」

なるほど、経験を積んで来いってことか。

「あとで、連絡してタダで打てるようにしといたる。相手に三子おかせてやれ。」

「ありがとうございます。」

第一話　3

和歌山市に出てきました。
二十分ほど掛かったかな。
毎日行くのは疲れそうだ。

「ここか。」

囲碁サロン。
地下にあるみたいなんだけど、はっきり言って、かなり胡散臭い。

とりあえず、入るか。

「こんにちは。

初めてなんですけど。」

タバコ臭ぇ。

カウンターに居たオバサンに話しかける。

「あぁ、坂口先生の子かい？」

別に孫ってワケじゃないけど・・・、合ってると言えば、合ってる。

「はい。」

「聞いてるよ。

強いんだって、互先で先生と打ってるらしいじゃないか。
となると、今だと堀田さんあたりが、五子で丁度いいんじゃない？」
見た目は典型的なオバサン、中身は親切なオバサン。
結局はオバサンだけど、こういう人のほうが、緊張していた僕にはありがたい。
「隠し子かい？」
先ほど、堀田さんと呼ばれた五十代のオッサンが話しかけてきた。
「ちがうよ！
坂口先生のお弟子さんや。な？」
な、って言われても・・・
「はい。片桐トウヤです。よろしくお願いします。」
「おっ、礼儀正しいな。
堀田や。ランキング5位。よろしく。」
頭をグシャグシャする。
意外と優しい人だった。
「ランキングって？」

オバサンを見上げながら、聞く。

「この碁会所内のランキングだよ。

目標があったほうが、精が出るだろ。」

なるほど。

いいな、それ。

しかし、5位で五子か。

1位は、三子か二子といったところか。

単純に、なめられてるのかもしれない。

「五子やったか、ほな、打とうか。」

堀田さんはもう席に着いてしまった。

「はい。」

「次は、六子でしましょう。」

圧倒だった。荒らしまくった、できるかぎり。

すると、堀田さんは、ココからってところで投了してしまった。

それで、さっきの台詞に戻る。

「七子でいきましょうか。」

少し難しくなってきた。

コミは無しの手合いで、僕の三目勝ち。

三目差だけど、まだ余裕があるかな。

次から、堀田さんとは、七子で打つことになった。

他のランカー達も来たが、やっぱり一番強い人は一位の人で江原さん、五子だった。

「次は、一色碁するか」

白の碁石が入った桶が二つ用意されている。

「師匠、なんすか、それ？」

「一色でするんだよ、碁を。」

そんなのもあるのか。

「意味ないんじゃないですか？」

「まぁ、息抜きみてぇなもんや。

ほら、にぎるぞ。」

「はい。」

第一話　4

八才になりました。

あれから、あの碁会所には、たまに行っています。

長期休暇とかの時に、週一で。

多面打ちや、持碁にする訓練なんてものも、やらせてもらいました。

やっぱり、碁は勉強しないと強くなれないようです。神様の補正だけじゃダメだ。

最近は、師匠にもたまに勝てるようになってきました。

師匠の体調が悪くなってきたのもあるのだが。

それでも、最近は、自分が強くなってきたのを感じます。プロの方相手にも、余裕がでてきた。

師匠と言えば、

強い、強いと思っていたけど、実は元本因坊だそうです。

関西棋院は、少し前から、勢力が落ちてきている。

三大タイトル戦のリーグ入りの人数も減っていて、活躍が目立たない。

そんな中、師匠が本因坊のタイトルを奪取したらしいのだ。三年前、つまり、僕に会う一年前に。

ただ、その直後、持病が悪化。

田舎に隠居せざるをえなかった。

今は、また、日本棋院の棋士の桑原プロが本因坊に納まったらしい。

師匠はよく

「あんな爺ぃより、ワイのほうが、本因坊に相応しい。」

と嘆いていますが、どっちもどっちだと思います。

方や、腹黒そうな爺さんと、方や、口の悪い爺さん。

秀策のような打ち手とは、とても思えません。まぁ、本因坊＝秀策ではないかもしれませんが。

さらに一年後。九才になりました。

老人ホームではなく、病院にいます。

「トウヤ、本因坊になれ。

関西棋院でも、日本棋院でもかまへん。プロになって、ワイの碁を昇華させてくれ。

お前の碁の中には、ワイの碁が生きとる。
お前と打ってるときなぁ、いつも、全盛期のワイと打っるみたいな気分になっててん。頼むわ。」
もう、目も開いていませんが、顔をこちらに向けて、搾り出すように言葉を紡いだ師匠は、今まで見たこともないくらい弱っていました。

「はい。」

師匠が死んでからは、あっという間でした。
告別式も葬式も一瞬で過ぎていきました。
ただ、棺に秀作の棋譜を入れたのは覚えています。

「君が、坂口九段の弟子かね？」
棋士の方から声をかけてもらったのは、久しぶりです。皆さん、気を使っていたようなので。
「はい。
桑原本因坊ですよね？
僕に何か？」

「フォッフォッフォッ
いや、長年のライバルの弟子の顔を見に来ただけじゃよ。
それにしても、坂口の奴、いい隠し玉を持っておる。
プロになるのを待っているよ。」
あんな笑い声、マンガ以外で初めて聞いたぞ。
そういえば、この世界、マンガだったっけ。
「あと、三年、修行するつもりです。
プロ入りしてからは、よろしくお願いします。」
小五でプロ試験を受けて、小六からプロになろうと思ってる。
「ん？
ということは、日本棋院に来るのかの？」
「えぇ、父の転勤についていくことになりました。
明日にも引っ越します。」
「そうか。
ふむ。

君の名前は？」

「片桐トウヤと言います。」

「覚えておこう。」

さようなら、と挨拶をした。

そこら辺にいそうな爺さんの後姿が、どうしてあんなに力強いのか。

貫禄というやつか。

流石は、師匠のライバルだ。

第一話　5

東京は人が多い。

そりゃあ、田舎の和歌山に比べるのもおこがましいかもしれないけどさ。

なんで、こんなに格差が？

まさか、これが日本の政治のせいか？

格差社会なのか？

ＧＨＱの陰謀か？

ドンッ！

アホなこと考えてるから、小さな子（同い年ぐらい）にぶつかったじゃないか。

都会の児童は違うなぁ、前髪、金髪だよ。

「わるい。

大丈夫？」

「いってー！

何やってんだよ！」

「もう、ヒカルがぶつかったんでしょ！
その子、立ってただけじゃない。
ほら、謝って。」
かあちゃんか。
っていうか、一人増えた。
赤髪かぁ、何も言うまい。
「いや、いいよ。
ヒカル（？）君に怪我がないのなら。
じゃあね。」
これが、進藤ヒカルとのファーストコンタクトだった。
セカンド？
その日の内だったさ。
家がお隣でね。

一年後。十歳になりました。
ヒカルは、同い年でした。

ヒカルが珍しく、部屋に来た。
すると、碁盤を発見した。
「片桐、碁なんてやってんの？」
「あぁ、むしろ僕は、碁をやってる時間のほうが多いよ。
一年も僕と遊んでるのにやっと気付いたん？」
「初耳だよっ。お前が言わなかったんだろ？
って言うか、関西弁でてるぞ。」
「ヤッベェ。
たまにでるんだよなぁ。」
親も、僕がプロになろうとするのは、止めません。
碁会所に行ったりしています。負ければ、碁石洗いで、勝てば、席料０。
一度も席料を払ったことがありません。ノリのいい人ばかりです。
碁会所に行ってて思ったのが、やっぱり韓国系の方は強いってことです。
負けたことはないけれど。

三子であそこまで接戦だったのは、久しぶりだった。

「俺にも教えてくれない？」

興味でてきたのかな？

熱中しやすく、冷めやすいからなぁ。まぁ、友達が強くなってくれたら、嬉しいしな。

「いいよ。

簡単に説明してあげよう。」

「難しい。」

うーーん。

じゃあ、小さい子に教えるみたいにやろうか。

「おおっ。

なるほど！

わかってきた。」

単純だった。

いや、きっと純粋なんだ。そうだと思う。

今年の目標は、ヒカルを院生レベルまで持っていくことにしよう。

二年後。

さぁ、プロ試験だ。

第一話　５（後書き）

地震が怖いことになってますね。
自分は、大学受験で西日本の日本海側に居たんですが、テレビで知って驚きました。

三菱東京ＵＦＪ銀行が特定非営利活動法人ジャパン・プラットフォーム（ＪＰＦ）を窓口とし、一般からの募金の受付口座も開設したそうです。振込先は同行本店（店番号００１）の「トクヒ）ジャパンプラットフォーム」で、口座番号は１３５４０５４。

皆さん、がんばりましょう。

第一話　6

プロ試験の結果。

予選、本選ともに全勝。

不作なのかな？

院生も、微妙だったし、ヒカルと同じくらいだ。

来年から、つまり、中一でプロ。

わかっていたけど、変な世界だよな。

プロ入りが決定した日のうちに、桑原本因坊が来た。

「ワシは、もう、研究会などはすることはないと思ってたんじゃが、三年前からもう一度やろうかと思っておっての。

どうじゃ？」

「・・・いつでしょうか？」

「皆の都合の合う日でどうじゃろう？」

「是非、行かせてください。」

「フォッフォッフォッ

片桐くんは、これからまだ暇じゃろ。どんどん、入れていこうかの。

連絡は、適当につけるからの。」

「はい。よろしくお願いします。」

「強ぇはずだよ、桑原本因坊に研究会に誘われてるぐらいだぜ。」

「師弟ではないみたいだ。」

「でも、桑原本因坊って、高齢だからってずっと研究会とかでてないらしいじゃない。」

「それだけ、すごいってことだろ。」

「すぐに、ポンポンって上がっていくんだろうな。」

院生の中でも、それなりに強かった子達が、集まってる。

なんで、受からないんだろ？

それなりに強いのに。

「おめでとう。」

今度は、知らない人だった。

いや、試験の説明をしてくれたプロの人と話していたような気がする。

「ありがとうございます。」

「予選も本選も全勝で合格を決めたらしいね。」

「まだ続きますから、本選が全勝になるかは、わかりませんよ。」

まだあるのに、残りも全部勝つなんてことを言ったら、嫌な奴じゃないか！

「そうだね。

迂闊だったかな。

ハハハ、自分は、週刊囲碁の記者なんだ。

少しいいかな？」

「かまいません。」

色々聞かれた。

碁よりコッチの方がキツかったかも。

帰宅後、部屋にはヒカルがいた。

「で、プロになったんだ？」

「あぁ、今日は疲れたから、悪いけどこのくらいにしてくれ。」

「えぇー、一局打とうぜ。」

そう、ヒカルは、きちんと碁を続けています。

「あと、一週間待ってくれ。

あぁー、でも、研究会もあるからなぁ。

とにかく、それまでは、頼むよ。な。」

お願いしてみる。

「しかたねぇなぁ。

じゃあ、頑張れ！」

なんだかんだで、いい奴なのだ。

テストは、悪いし、たまに我侭だけど。

「アリガト。」

早く寝たい。

第一話　7

プロ試験は、全勝で終了しました。どうやら、強い人との対局は、前半の方に集中していたみたいです。

そういえば、年が同じくらいの子とばかり打った気がします。

そして、今日は、桑原本因坊との研究会です

桑原本因坊によると、毎回参加するのは、僕と桑原本因坊だけで、後は、適当に桑原本因坊が声をかけて、その場、その場で上位段者を集めるそうだ。

今日は、座間王座が来ています。

すげぇー。

かなり恵まれています、タイトルホルダー二人との研究会ですし。

二人とも、貫禄があります。オーラとか出てるんじゃないか？

怖いです。

「では、座間王座、打とうかの？」

「えぇ。

久しぶりですな、桑原本因坊と打つのは。」

自分のタイトル以外は、勝ち進んではいますが、リーグ入り手前ぐらいで立ち止まるみたいですね。

お互いに自分のタイトルで精一杯なのか、それとも興味がないのか。

おそらく前者だが、高齢の桑原本因坊はともかく、座間王座は、まだまだしがみつくだろうな。

「遠慮しなくてもいいよ。

片桐くん、もっと近くで見なさい。」

座間王座、めっちゃいい人。

「桑原本因坊もいいお弟子さんをとられましたな。

プロ試験、全勝でしたか。」

「いや、弟子ではないんじゃよ。

全勝はしたがの。」

「ほう！

では、どういった繋がりで？」

「ライバルの、坂口の弟子なんじゃ。」

「関西棋院の坂口プロですか？

そりゃあ、強いはずだ。

ん？

ということは、片桐くんも本因坊を目指すんでしょう。

これ程の環境はないということか。」

「ふむ。

ワシも気を付けなければな。

よし、ワシが黒じゃな。

幸先がいいのぅ。」

「「お願いします。」」

ヒカルとの久々の対局。

僕の部屋ですることが、多いです。

「くっそぉー、三目半負けかぁ。

でも、三目半だけだもんな。

また、置石一つ減らそうぜ。

次からは、二子でやろう。」

「いいけど、また中押しとかになるぞ？

きっと。」

「癇癪なんか起こさねぇよ！」

「はいはい。」

「じゃあ、二子置くぜ。」

パチン、パチンと慣れた手つきで石を置く。

そういえば、新初段シリーズとか若獅子戦があるな。

言っとかないと。

「来週ぐらいから忙しくなるんだ。」

「えっと、なんだっけ。

新初段シリーズとか若獅子戦だっけ。」

「何で、知ってんの？

タイトルとかも知らないのに。」

「じいちゃんが、言ってたんだよ。

あっ、サイン欲しいとも言ってたな。」

「行きにくくなった。」

「そう言わずに、行ってくれよ。

暇な時でいいからさ。」

「あぁ。

お前も行けよ。」

「えぇー！

じいちゃん、何回も碁を誘ってくるんだぜ？」

そう言えば、テストが悲惨すぎて、おこずかいが停止になったって言ってたな。

「お爺さんの家ってさぁ、蔵あったじゃん。

今、骨董品が高く売れるらしいぜ。」

「よし、次の休みにでも行こうか。」

単純いや、純粋なんだろ、きっと。

あれ、同じことを言ったことがある気がする。

「行って来い。」

第二話　1

新初段シリーズとは、日本棋院が発行する“週刊碁”の企画の一つで、新入段者が一線棋士に胸を借りて対局するよいうもので、毎年の新入段者が出場する。

そう、僕もやるのだ。

相手は、一柳プロ。

ツルツルの人だ。

よく、しゃべり倒している姿をよく見る。

桑原本因坊や座間王座と同じ、古参と呼ばれる日本の囲碁界を代表する人だ。

確か、棋聖にもなっていた。

口下手な僕へのあてつけだろうか。

さっきから、やたら僕に話しかけてくる。

マシンガンってのはこういうのを、言うんだろう。

あなたの叔母の話なんて聞きたくもないですよ。

そう言えたら、なんて楽なんだろう。早く、対局始まらないかなぁ。

「「お願いします」」

僕が、黒。

調子がいい。今朝は、大事な対局前のジンクスになっている朝風呂にも入った。

いい感じだ。

上位段者と打てるようになるのは、あとどのくらい時間がいかかるだろうか。

勝ち進むにしても、三次予選ぐらいまでは進まないといけない。

せっかくなのだから、存分に楽しもう。

初手天元。

「む！」

一柳は、目を大きく開いている。

カシャ、カシャと物凄い写真を撮られる。

当然のリアクションだな。

まぁいいや。

僕は、この石を生かせばいい。ただ、それだけを考えろ。

集中しろ。
読め。
自分ならどう打つ？
先回りして、ひっくり返せ。

一柳プロは強いけど、まだ師匠の方が強い。
纏え、あの気迫を。
突き放せ！

パチンと、いつもより大きめに音がなる。
勝負をしかけてきたらしい。今のところは、僕が少し優勢。
周りから見ると、今の手で五分に戻った、もしくは一柳プロ優勢。
でも、それは、もう想定済みだ。さっきの僕の手は、隅の攻防を狙ったんじゃない。
内から食いつぶしてやる。

一柳プロは、顔がいつの間にか真っ赤になっている。

「負けました。」

「ありがとうございました。」

ふー、疲れる。

タイトル戦が、一日一局しかない理由が骨に沁みた。

一柳プロは、すぐに出て行ってしまった。あの巨体で、あんなスピードをだすと危ないだろ。

「おめでとう。どうだった、高位段者との初対局は？」

髭の記者の人が話しかけてきた。

「流石、一柳プロですね。

一手一手が、殴られてるような感覚でしたよ。

花を持たせてくれたんじゃないですかね？

将来、一柳先生のようになれるといいです。」

ハッハッハッとその人は笑って、大人っぽいね君と言うと、これからの意気込みについて聞かれた。

「本因坊になりたいです。」

桑原先生も危ないな、と言いながら、記者の人は帰っていった。

久しぶりにヒカルと打つことになった。

「あれ？

ヒカル、強くなった？」

まるで、一皮剥けたような・・・。

「どういう意味だよ！」

「いや、前から成長速度が速いとは思ってたけど、これは少し違うな。

一皮剥けたような？

いい先生でも見つけた？

ライバルとか。」

「ギクッ！？」

「ふーん、両方ってところかな。

いいことだよ、それは。

才能のある人には、そういうのが不可欠だ。

彼らが、才能を伸ばすんだから。」

「いいじゃんか、早く打てよ。

今日こそ、俺が勝つぜ。」

それは、まだ早いかなぁ。

第二話　2（前書き）

気付かれた方もいらっしゃるかもしれませんが、語り部の口調が変わりました。事後報告で申し訳ありません。

第二話　2

ｓｉｄｅ　Ｈｉｋａｒｕ

昨日、蔵に行って、救急車で運ばれた。

朝になったら、夢だと思ってたオバケが現れた。

碁をさせろ、とごねるから打ってやったら、ボコボコにされた。

教室や廊下で吐いちゃったし。

はぁ、疲れた。

っていうか、佐為。

『なんでしょう？』

お前が、本因坊秀策ってホント？

『はい、虎次郎は私に碁を打たせてくれました。神の一手を極めるために。

でも、流行り病にかかってしまって、若くして亡くなりました。』

お前がいたから、死んだんじゃなくて？

『当たり前です。

感謝こそしても、恩を仇で返すようなことはしません。』

ふーん。じゃあ、いいか。

碁も強いみたいだし。

でも、俺が、お前に代わるのは嫌だからな。秀策みたいに。

俺は、碁をもっと打ちたいんだ。で、プロになりたい。

『ぷろって何ですか？』

碁を打ってお金をもらってる人達。めちゃくちゃ強いんだぜ。

『ぜひ打ってみたい！』

うーん、でも俺もプロ目指すんだぜ。

今は、俺が弱いから、佐為が打つとヘンな事になるだろ。

『なら、ヒカルが強くなればいいんですよ。』

それもそうか。

なら、俺に碁を教えてくれ。

『いいですよ。

でも、ヒカル。気になっていたんですが、今までどれだけの人と打ってきましたか？』

佐為をいれなければ、二人だけ。じいちゃんと片桐だけだな。

『たくさんの人と打ちましょう。

実力もある程度ともなってますし、碁が好きな人が集まる場所とか知らないんですか？』

そういえば、片桐が、名人が経営してる囲碁サロンがあるって言ってたような・・・。

『なんだか、あやふやですね。』

仕方ねぇだろ。お金払わないといけないんだから、俺には関係ないとおもってたんだ！

『強くなるためですよ。』

・・・・行くか。

第二話　3

ｓｉｄｅ　Ｈｉｋａｒｕ

結構分かりやすい所にあったな。

『はやく行きましょうよ、ヒカル。』

わかってるよ。

「いらっしゃい。」

うわ、ジジィばっかり。

「君、ここは初めて？」

「ここもなんも、まるっきり初めて。

誰でも打てるの？」

受付のお姉さんが、紙とペンをだしてくる。

「名前書いて。

棋力はどれくらい？」

佐為って、どれくらい強いのかな？

「わかんない。」

「え？

人と打ったことないの？」

うーん、めんどくさいなぁ。

「そういうわけじゃないけど、たぶん強いよ。

なんだ子供も居るじゃん。」

「あの子は・・・」

お姉さんが、何か言おうとしたのを、その子が遮った。

「対局相手を探してるの？

いいよ、僕打つよ。」

「ありがと、席料は？」

「子供なら５００円よ。」

「むっ！？」

高い！！

「初めてココに来てくれたんだから、サービスしてあげてよ。」
めっちゃいい奴。
「明君が、そう言うなら。」
「奥に行こうか。」
「うん。」
特等席？
よかったな佐為、この子強いんじゃない？
『えぇ、千年ぶりに強者の空気を感じます。』
悪かったな、弱くて！
「僕は、塔矢アキラ、６年生。
君は？」
「進藤ヒカル。
六年生だ。よろしく。」
「棋力はどのくらい？」
「わかんない。」

「じゃあ、置石は、どうしようか？」

「とりあえず、無しで打とう。」

「わかった。先手でどうぞ。」

「あぁ。」

佐為、泣いてんのか？

『うっ、うう、・・・嬉しいのです。

ヒカルと居れば、まだまだ私は、打てるのですね。』

あぁ、早く打とうぜ。

『ヒカル、ありがとう。』

ほら、先手だぜ！

『１７の四、右上スミ、小目。』

『３の十六。』

『１６の五。』

思ってたんだけどさぁ。

『どうしたのですか？』

いや、いい。後で、説明するよ。

『そうですか、１４の四。』

ん？

「どうした？

早く、打てよ？」

そこで、そんな手で来るのか！？

佐為も強いけど、コイツもめっちゃ強い？

左上は、とれたけど、中央の支配が向こうだ。

大丈夫かよ？

『たぶん。

４の十三。』

『８の五。』

うわっ、すごい手がでたな。
実力差をみせつけるみたいだ。

2目差か。

お前が強いのは知ってたけど、アキラもめっちゃ強いんだな。

『えぇ、ヒカルの何倍も強いですね。』

うっせぇ！

『でも、きっと追いつけますよ。

いつか。』

何時かかよ・・・。

『才能はあると思いますよ。

まだ、磨かれていないだけ。』

お前も、トウヤと同じこと言うんだな。

『トウヤ、塔矢ですか？

さっきの子が何か？』

違うよ。片桐トウヤ、知り合いのプロだよ。

俺に碁を教えてくれた人。もしかすると、塔矢より強いかも。

『打ちたいですね。』

流石に無理だよ。

片桐は、俺の棋力をしっかり分かってるだろうし。

『なら、ヒカルが私ほど強くなるまで待ちましょう。』

きっと、直ぐだぜ。

『ヒカルのくせに。』

ふん！

出るか。

『はい。』

「あら、終わったの？」

お姉さんか。

「うん、またいつか来るよ。」

「はい、お待ちしてます。」

「じゃ！」

「いつか、か。

アキラ君と打つのは五十年早かったな。」

「えっ、アキラ君、負けたの！？」

「何子置いたんだ？」

「そんなバカな、アキラ君はプロに近い実力を持ってるんだろ？」

「二目負けなんだろ。コミをいれたら、アキラ君の勝ちじゃないか。

」

「うそ・・・。」

第二話　4

side　Hikaru

昨日、遅くまで佐為と打ってたから、眠い。

一日学校があると思うと、しんどくなる。

おはよう、と皆に挨拶をしながら教室に入ると、オレの隣の席には既に片桐は座っていた。

棋譜を読んでいるようだ。

『ヒカル。

この者が、片桐トウヤですか？』

そうだけど、よく分かったな。

『彼も、また神の一手を極める者でしょう。』

ふーん。

よく分からん。

『彼と打てないということが、悔しい。』

無理なものは、無理だぜ。

「ヒカル、久しぶり。

今日は打てるけど、打つか？」

「あぁ、今日は片桐ん家でやろうぜ。」

今日のテストは算数で、佐為はまったく役に立たなかった。

中盤だ。

「あれ？

ヒカル、強くなった？」

「どういう意味だよ！」

「いや、前から成長速度が速いとは思ってたけど、これは少し違うな。

一皮剥けたような？

いい先生でも見つけた？

ライバルとか。」

「ギクッ！？」

相変わらず、碁に関してだけは、鋭いな。

「ふーん、両方ってところかな。
いいことだよ、それは。
才能のある人には、そういうのが不可欠だ。
彼らが、才能を伸ばすんだから。」
なんか、皆、オレを褒めるよな。
『ヒカル、調子に乗っている場合ではありませんよ。
次の手で、大きく動きますよ。』
わかってる。
「いいじゃんか、早く打てよ。
今日こそ、俺が勝つぜ。」
昨日、あれだけ練習したんだし。

三目差か。

佐為が鍛えてくれるし、すぐに一子になる。

次は、互先で圧勝だ！

『ヒカル、言いにくいんですけど、これは指導碁なのでは？

この者の実力は、はるか高みにあるように思います。』

指導碁？

『指導碁とは、上手が下手に碁を教えるために、文字通り指導目的で打つ碁のことで、勝負にはこだわらないことが多いです。私が、塔矢アキラと打った碁です。』

つまり？

『この者は、本気で打っているわけではありません。

おそらく、ヒカルが多少強くなったとしても、二目もしくは三目差で負けます。』

何だよそれ！？

『仕方ありませんよ。

この者もヒカルの成長を願っているのですよ。

強くなるしかありません。』

なんか、納得できないけど強くなるしかないのか。

『はい。がんばりましょう！』

あぁ。

「片桐、今の、どこから悪かった？」

第三話　1（前書き）

三話は、プロ認定から若獅子戦です。

第三話　1

そういえば、スーツってどんな風に買いに行けばいいんだろう？
小学生だぜ？
背もすぐに伸びるだろうし。
っていうか、オーダーメイドになるのか？
うーむ。
ま、とりあえず、行けばいいか。店員さんに何とかしてもらおう。

日本棋院のプロになるには、夏にある試験に合格しなければならない。
でも、合格してすぐにプロとしての手合いがあるわけではない。
翌年の春からなのだ。
その前に、新初段シリーズとかもあるが。あれは、特別だ。
今日は、３月Ｘ日。
新入段者免状授与式である。
である、なんて言ったが、実際はオマケの様なものだ。
それは、言い過ぎかもしれないが、平行してさまざまな表彰式がおこなわれる。
当然、一流棋士たちが来るので、名前の知られていない僕たちは注

目度は少ない。

まぁ、これから僕たちは、プロになるのだ。

テンションは上がりまくってる。あまり顔にはでていないが。

他の新初段者は二人とも院生だったらしく話をしているが、僕は、はじめて生で見る有名棋士たちを観察していた。

「片桐君、久しぶりじゃの。」

桑原本因坊ですか。

おぉ！

まるでモーゼのように、人の海が開いていく。こういうのを見ると、タイトルホルダーっていうのをビシビシ感じるなぁ。

普段は、下ネタとかいってるのに。

「桑原本因坊。

いえ、前に会ってから一週間もたっていません。」

ついにボケたか。

「そうじゃったかの、年のようじゃ。

フォッフォッフォッ。」

確信犯か、狸め。

「普段、年寄り扱いをすると嫌がるくせに。」
軽口をたたくと、桑原本因坊が急に真剣な顔つきになる。
「まだまだ現役じゃ。
塔矢君に緒方君、倉田君にもお主にも、負けんよ。」
自らの力への確固たる自信。
数多くの死線をくぐった経験。
それらが僕に圧し掛かる。でも、引くわけにはいかない。
「僕が引導を渡しに行くまで、その座にしがみついていてください。
直ぐにでも、迎いますので。」
そして、二人ともニヤリと笑う。
若干、周りの人たちが引いている気がしないでもない。
「二人とも、何してるんです！
此方に来てください。」
係りの人が呼んでいる。
「この年で、怒られるとはの。」

何故、恨みがましい目でみてるのでしょう？

「本因坊が、話しかけてきたんでしょう？」

僕も睨んでやると、フンッと鼻を鳴らしていってしまった。

「年寄りに優しくないと、モテんぞ。」

「その言動は、どちらかというと子供では？」

第三話　2

小学校の卒業式。

何か、あっという間だったな。

とくに実感もないし、まぁ、今年からプロだから学校とかそういうのよりも、碁のほうが面白い。

校長の話長ぇ。

ＰＴＡの代表って、うちの親だったんだ。今初めて知った。

「よぉ！

ヒカル、アカリ。」

相変わらず、仲が良い。

あれで、ただの幼馴染だっていうんだから詐欺だよ。

いや、意味がわからないな。

「「片桐（君）！」」

吃驚したような顔をしている。

「久しぶりに会った気がするな。」
二人のもとに駆け寄る。
「気がするんじゃなくて、久しぶりなんだよ。」
アカリは、呆れた様に言う。
「お前、最近来てなかったから、卒業式も来ないと思ってた。」
ヒカルは、なんだかんだで真面目だからな。
「卒業式の練習しかないだろ。
行っても意味がなかったじゃん。
そんなことしてるなら、棋譜を並べたりするほうが有意義だ。」
師匠の古い棋譜が、師匠の親族から送られてきたんだ。
「そっかぁ。片桐君、プロなんだもんね。」
アカリが、自分のことのように嬉しそうに言う。
感情の起伏が激しいな。
「かわいいなぁ、アカリは。
ヒカルのじゃなきゃ、なぁ。」
羨ましそうに言ってみる。

「「いや、そんなんじゃないしっ！」」

二人と同じ学校に行けないのが悲しい。

「そういえば、こんなやり取りも最後だね。」

アカリが、悲しいことを思い出したかのように言う。

ちょっと、瞳が潤んでいて可愛い。

葉瀬中には行かないで、私立中学に行くことにしたからだ。

【対局日を休んでいい】ということと【授業料の免除】とを引き換えに、【囲碁部との指導碁を週に2回】という条件を引き受けた。

「そうだな。」

「えっ！なんだよ、それ！？」

ヒカルが騒ぐが、言ってなかったっけ？

「片桐君、私立に行くんだよ。」

知らないの？、と言うふうにアカリが尋ねるが、ヒカリは耳を全く貸さない。

「俺、一回も勝ってない！」

強くなったけどね、まだ僕に勝つほどじゃない。

こんなところで負けるようじゃ、桑原本因坊の首は刎ねられないだろう。

「一週間前に連絡をくれれば、都合が合う日を教えてやるよ。」

「何で、上から目線なんだ！？

まぁ、家は近いしな。なんとかなるか。

そうだ！今日このあと、時間あるか？」

今日は、何もなかった気がする。

「あるけど、打つのか？」

「アカリも囲碁教室に通ったから、強いはずだぜ。」

二面で・・・か。面白いかも。

「アカリは、いいのか？」

ヒカルは、自分勝手だから。

「えっ！？

用事はないよ。でも、プロと打つのってお金掛かるんじゃ・・・。」

残念そうに言う。

「いいよ、そんなもん。

じゃあ、家にくるか？」

碁盤を二面使うとなると、我が家しかないだろう。

「よし、行こうぜ。」

「「僕（片桐君）の家に行くのに、ヒカルがどうして先陣きってるの？」」

過去語　1

ｓｉｄｅアカリ

ヒカルが、碁を始めた。

そう聞いたときは吃驚して、おばさんの前なのに開いた口が塞がらなかった。

何故、碁なのかも分からなかった。

前に、おじいちゃんに誘われたときは、ジジ臭いってやらなかったのに。

理由を聞いてみると、分かりやすかった。

片桐君が、やっているそうだ。

いつも通り、すぐに辞めると思っていたけど、なかなか続いている。

もう一年がたつ。

片桐君が、優しく教えてくれるみたい。やっぱり仲がいい子とやると、長続きするのかな。

ヒカルは、才能があるらしいけど、私は碁が分からない。

三人で遊ぶときにも、ヒカルは碁の話をする。
私は、全然わからないんだけど、なんだか二人ともニコニコ笑ってる。
低学年の子たちのようだ。
クラスの女の子たちは、片桐君は落ち着いていて大人っぽいと言うけど、とてもそんな風には見えない。
碁ってそんなにおもしろいのかな？
私もやってみたい。
今度、片桐君の家に行くときにお願いしてみよう。

「えぇーっ！
アカリもー！？」
そんなに驚かなくてもいいじゃない。
「いいんじゃない。
やろうよ。」
流石、片桐君。

ヒカルに頼むと、あんな反応して教えてくれないだろうから、三人の時に頼んだんだ。

「うん。」

「えぇー！」

私だって、碁をやったっていいじゃない！

「じゃあ、ここで。」

「うん、正解。」

今、九路盤で打っている。

詰め碁というらしい。

始め、片桐君は、二つ盤を出してきた。

大きいのと小さいの。

大きいのをヒカルの前に置いて、小さいのを私の前に置いた。

で、説明して、今に至る。

だいたい分かってきた。

すると、片桐君は難易度を上げた詰め碁を並べていく。

片手で、ヒカルの相手をしながら。
片桐君は、かなり強いみたいだ。

「なんでヒカルは、碁を続けるの？」
ずっと、気になっていることだった。
「ん？」
ちゃんと聞いてはいたけど、意味が分からないって顔をしている。
「いつも、すぐ辞めちゃうじゃない。
野球とか。」
ヒカルは、んーっと言って、すこし考えて、恥ずかしそうに答える。
「じいちゃんがさ。
あんなに嬉しそうにしてるのって、初めてみたんだよね。」
「おじいちゃん？」
「そ。

俺もすぐに飽きちゃうかな、って思ってたんだけど。

じいちゃんと打った時にさ、じいちゃん負けたんだけど、すっげぇ嬉しそうだったんだよね。

片桐も、今まで同じ年齢の奴と打ったことないって言って嬉しそうだし。」

才能もあるらしいし、そう言って、はにかむ。

私、ちょっと顔が赤くなったかも。

恥ずかしい。

て、余計赤くなる。

うぅーっ！？

「わ、私。

すぐ強くなるから！

囲碁教室とか行って、強くなるから！

だから！」

たくさん打とう！

第三話　3（前書き）

伊角さんはコレとコノ次だけです。

第三話　3

ｓｉｄｅ　Ｉｓｕｍｉ

今日は、若獅子戦だ。

若獅子戦とは院生トップ１６人（一組）と、若手プロ（五段以下）が対局する院生が唯一参加できる棋戦。

つまり、ここで俺の力が通用するなら、プロになれる可能性が高くなる。

さらに、勢いのあるプロの人と打つことができるのは、勉強になる。

今年こそプロになる。毎年それを思いながら、打ってきた。

だが、去年はプロ試験初戦に全勝合格をなしとげる現片桐初段とあたり、彼の力に呑まれてしまった。

次の対局もそのことを引きずってしまった。

結局その二敗が響いて、今年もプロになれなかった。

嫌な苦い記憶だ。

終わってから、俺は何をうじうじしてたんだ、と途轍もなく落ち込んだ。

でも、吹っ切れた。
あんな惨めな思いをしない様に、必死に勉強して、研究して、何度も打った。
イケる。
少なくとも、去年の俺とは比べものにならないくらい強くなった。
初戦はまたも片桐初段。
和谷には、運命かも、なんてからかわれたが、そうかもしれない。
プロ試験では、付いても行けなかったが、今度こそは、いい碁を打とう。
そして、今年こそプロになろう。

考え事をしていたからか、歩みが遅くなっていたようだ。少し、遅くなってしまった。
遅刻ではないが。
院生は全員揃っている。
俺が、最後だったかな？
「おはよう、伊角さん。

最後なんてめずらしいじゃん。」

「おはよう、和谷。

そうだな、いつもは和谷だからな。」

「うっせー。」

やっぱり、今日はかなり調子がいい。

程よい緊張感と、気合。体調もいい感じだ。

「おはよう、伊角さん。

初戦、片桐初段だから、逃げたのかと思ったよ。」

癇に障る言い方だな。そんな言い方だから、メガネキノコなんて言われるんだ。

本当は、真っ直ぐでいい奴なのに。

「越智、お前はいつもズバズバ言うな。

まぁ、遅れた理由はそれであってるんだけど。」

「へぇ、片桐初段のこと、トラウマになってんの？」

「いや、逆だよ。

打てるのが、楽しみでさ。眠れなかったんだ。」

大事な対局前だから、ぐっすり眠りたかったんだけど、なかなか眠れなかったんだよな。

「なんだか、子供みたいね。」

いつのまにか、皆が集まってきていたみたいだ。

「茶化さないでくれよ、奈瀬。」

「そう言ってもらえるのは、光栄です。」

片桐初段だった。院生の皆のほうが背が高く、近くにいるのに気がつかなかった。

皆、驚いているみたいだ。

無駄に敬語を使うので、バカにされてるように感じる。

「いえ、こちらこそ、初戦で片桐初段と打てるのは有難いです。覚えてますか？

プロ試験で対局したのですが。」

覚えてないかもしれない。彼には、つまらない対局だっただろうから。

「本選の初戦ですよね。」

彼は、ニコニコしながら、俺の目をみて話す。

「はい、あの時はあっさり負けてしまいましたが、今日こそはいい碁を打って見せますよ。」

急に顔つきが変わった。喜から怒にかわる。

「そうですね。では。」

顔を顰めながら向こうに行ってしまった。

なにか悪いことをしただろうか。

第三話　４（前書き）

嫌な奴になってしまった。

第三話　4

side　Isumi

先手は、俺たち院生となる。

目の前の少年は、まだ石を打たれていない盤を見つめている。また、呑まれそうになるが、あの時の俺とは違う。

この少年は、俺より強い。

すこし大人っぽいが、この前まで小学生だった。

だが、そんなことは関係なく、一流の棋士のような空気を纏い、相手を殺しにくる。

一柳棋聖との棋譜をみたが、目を疑った。

これほどまでに強いのか、あの若さで。

情け、容赦は当然のことながらなく、一縷の慢心もない。

冷静に、一切の焦りもなく、ただ終局の図を頭の中に作り上げる。

最高の相手と言ってもいい。

一度、深呼吸をする。

ふぅー、と息を吐いて、碁石をつかむ。

初手は昨日から決めていた。

さぁ、俺がどれだけ強くなったのか見せつけてやろう。

ｓｉｄｅ　Ｗａｙａ

いい碁が打てた。

前のプロ試験で、なんか掴めた気がする。

しかも、今日勝ったのは、最近調子のいい橋本二段相手にだ。

いい感じだ。幸先がいい。

今年こそ、プロになれるかも。

いや、なるんだ、今年こそは。

検討はしないでもいいや。

他の人たちはどうなったかな。

あっ！

そうだ、伊角さんのところに行こう。

気合入ってたからなぁ。

ん？

伊角さんは、椅子に座って顔を盤にギリギリまで近づけている。

必死に活路を見出そうとしているが、見つからない、そんな感じだ。

片桐は、隣の盤を覗き込んでいる。

もしかして、もう負けたのか？

俺は、中押しだったから早いけど、あんなに気合の入った伊角さんがそんなに簡単に負けるわけがない。

早すぎる。

また、プロ試験みたいにならないでくれよ、伊角さん。

side Iaumi

なんだこれ？

まだ序盤だろ、たくさん手があるじゃないか。

でも、どうして、負けるビジョンしか生まれないんだ？

イケる気がする。

当たり前だ、諦めるには早すぎて、様々な手が浮かぶ場面だ。

でも、先まで読むと、自分が投了せざるを得ないような盤面にしかならない。

なんだよ、これ。

「伊角さん、まだ続けますか？」

！！

くそ！ないのか、もう。

・・・・・・・・・・・・いや、待てよ。ここは、コスム一手だと思っていたけど、カカリだとどうなる？

・・・細かくなって読みにくいが、もしかすると、中央に食い込めるかもしれない。

イケる。

パチンッ！！

片桐初段は、顔を顰めた。やっぱり、いい手だったんじゃないか。

パチ、パチと、片桐初段も俺も、俺の読みどうりに打っていく。

このままいけば、五分になる。

やっぱり、俺は強くなってる。

パチンッ！

なっ！？

しかし、ここで読みから外れた。

「この石、取りたくなりますよね。

いえ、取らないと、せっかく作った僕の形が崩れそうにも見えます。

でも、見えるだけです。」

取るものだと思っていた。

そんな手でいいのか？

いや、アレは取るしかない。こんな手でイケるわけがない。

パチッ

冷静に対処しろ。

パチッ

鎌をかけているだけだ。

パチッ

・・・アレ？

先ほど、あの石を取らなかった事が原因で、崩れた片桐初段の形がまた完成されている。

じわじわと、裏を突くように気付かれないように、他の役割があるように偽装して打っていた。

ヨミには、それなりの自信があった。

それを砕くように打ってきた。

精神を折るように。

まだ中盤だが、片桐初段には、既に終局の図がみえているだろう。

「だから、言ったでしょう？

終わりなんですよ。

まぁ、最後まで打ってもいいですけど。」

心底残念そうな顔で俺を見る。

「いえ、・・・・・・・・負けました。」

第三話　5

伊角さんは院生の一位らしいが、微妙な強さだ。

プロには、なれるだろうけど、タイトルは無いみたいな。

まぁ、タイトルが全てとは言わないが。

指導碁が上手かったり、解説が丁寧だったりするプロもありだろう。

でも、いくら棋力の差があるからと言って、【いい碁を打つ】のではなく、【勝つ】って感じで来て欲しいものだ。

さて、次は、板倉四段だ。

よくテレビに出ている人だが、打っている姿は見たことが無い。

何故なら彼は強くはない、イケメンなのだ。

よくＮＨＫの解説に呼ばれるらしい。

オバチャンたちの棋士ランキングは、二位。（一位は、塔矢名人）

これは、倒さねばならないだろう。

・・・圧勝だった。

伊角さんより弱かったかもしれない。伊角さんの評価を上方修正しておく。

まさか、中学生に負けるとは思っていなかったらしく、プルプル震えている。

悪い人ではないが、行動の一つ一つが僕を苛つかせる。でも憎めない。

そこが人気の理由でもあるのだろう。

プロにはそういう才能も必要なのかもしれない、接客業だし。

次は、メインイベントだ。

いわずと知れた、倉田五段だ。

緒方九段を筆頭に、桑原本因坊たち古参の方々を崩していく注目の若手の一人だ。

世界的にも有名らしい。

この人も変った人だ。

ジブリ映画の、家の近く森に住む知的生命体に似ている。

「ちっせーな君。

何歳？」

「この春から中学生です。」

小さくないつもりなんだが。

「そうか、そうか。

じゃあ、俺に憧れちゃうわけだ。」

は？

「何故、そういう結果に？」

やはり変わった人だ。

「だって、俺の世代じゃん！

あっ！サインとかいる？」

「結構です。」

「謙虚だなぁ、ま、他のプロのサインを欲しがるようなプロは、底が知れてるけどね。」

「・・・・・」

ちょっと格好よかった。

「俺はさ、君に期待してるんだぜ。

一柳棋士に勝っただろ。

プロになってからの初の手合いで、真剣に挑んできたタイトル保持者に実力で勝った。

俺は今まで、上だけを見て来た。

ずっと、俺の下には、俺より弱い奴しかいなかったんだ。

でも、あの棋譜見たときに思ったね。

やっと出てきたかって。

緒方先生や、俺、さらには君が出た。

日本の囲碁界は、荒れるぜ。絶対。」

格好いい。

これまでの棋譜を見る限り、この人は若手の中では一番だろう。

真剣に打ってもらいたいが、どうすれば・・・

ちょっと、怒らせてみるか？

「自分を高評価してくださるのは、ありがたいことです。
でも、低く評価されるのは、嫌いです。」
「ん？」
「あなた方は、僕の前座ですよ。
緒方九段も、貴方も。」
「な！？
カッチーン！
そんなこと言っちゃうんだ。負けたらきついよ、そんなこと言うと。
」
怒らせ過ぎちゃったかな？
さぁ、打とうか。

第三話　6

僕が、黒。

よって、倉田五段が白。

初手、１７の四。

パチンッ！

やはり怒っているようで、音が大きい。

二手目３の十六。

４の三。

１６の十七。

と打ち続けていく。

音に反して、倉田五段の打ち筋は、よどみなく、思い切り良く、的確で、ある意味穏やかだ。

読み間違えなどなく、風貌からは想像がつかないぐらいに丁寧。

慎重だ。

認めてくれているということだろう。

だが、少しずつ僕の方が良いようになってきている。

「クッ！」

と、苦しそうに打つ倉田五段は、必死の形相だ。

今は僕のほうが、少し良いくらいで、このままだと倉田五段にとっては、ただ生きるだけで、じり貧。

いつか、動いてくる。

パチンッ！！

来た！

１１の七。

白９０からの出切りか。

上辺の黒一団との攻め合いをねらった手だろう。

非常に難解だが、第一感は白が大変な印象といったところか。

渾身の勝負手、ここからが、勝負。

「ここからですね。」

「あぁ、吠え面かかせてやる。」

話は終わったという風に、目線を盤にもどす。

「マ　ケ　　マ　シ　タッ！」

そう言うのが、とても嫌らしい。

結果、２６５手完、片桐トウヤ初段黒番中押し勝ち。

ふぅ、久々に緊張感のある碁を打った。

トップ棋士、例えば、塔矢行洋名人でも、勝率は七割。

常勝はありえない。

倉田五段は、僕を負かす人間の一人だろう。

「悔しいなぁ。

うーん、もう一回打とうぜ。」

「今からは、無理ですよ。」

「誰も今からなんて言ってないだろ。

終わってから、近所の碁会所にでも行こうぜ。

奢ってやるから。」

「いいですよ。」

強い人と打てるなら、いくらでも行くさ。

「じゃあ、俺に勝ったんだから、あと二回勝って優勝しろよ。

絶対な。

俺、うな重食ってくるから。」

自由な人だな。

「言われなくても、そのつもりです。」

まぁ、はっきり言うと、負けない。

僕を除けば、倉田五段が、この会場内にいた一番の強者だったから。

周りの人は驚いているけれど、僕からしてみれば、ここが事実上の決勝戦。

真面目には打つが、倉田五段ほどの相手は、出てこないだろう。

初手天元とか、やってみようかな。

第三話　６（後書き）

棋譜は、第３５期名人戦七番勝負第４局
白、高尾紳路　九段　　黒、井上裕太　名人
から。

第三話　7

優勝した。

詳細はない。

二人とも強かったけれど、倉田五段と比べると・・・。

今は、碁会所にいます、倉田五段と。

「見えた！

ここだぁー！」

今の叫びは、倉田五段だ。

「でも、終局ですよね。

僕の勝ちで。」

三目半勝ち。

「確かに、現象としてはそうかもしれないな。」

「現象というより、事実なんですが。」

「・・・・・・・

さぁ、もう一回打とうぜ！

お前、初手天元な！」

無視された。

しかも、打ち方を一方的に決められた。

「もう三回目ですよ。

そろそろ帰りたいのですが。」

「俺、一回も勝ってないし。

今日は調子が悪い。」

知りませんよ！

って言ってやりたい。

でも、わざと怒らせたことを説明して謝罪すると、「何回か対局してくれたら許してやる。」と言われた。

敵はつくりたくなし、倉田五段はいい人だ。

だから、対局してるんだが、倉田五段は体力が半端なかった。

お互い実力者同士なので、一度対局するたびにかなりの体力を消費する。

しかも、若獅子戦のまま来ているので、僕の体力は限界なのだ。

かといって、手を抜くと看破される。

カンがいいらしい。

ムシャムシャいいながら、勝手に僕の石、黒の石を天元におく。

カツカツと、カツ丼を口にかきこむ。

箸と丼が当たっている音が、客のあまりいない碁会所に響く。

よく食うな、この人。

さっきまで、うな重をたべていたらしいのに。

「もぐもぐ。

じゃあ、二手目、俺ね。」

そう言って、手を拭いてから、石を持ち、打つ。

そういうところは、かっこいい。

勝った。

「今日は、これくらいにしといてやるよ。」

ぶー、と言いながら、タクシーに乗り込む倉田五段。

タクシーが少し傾いた。

「じゃあな、期待してるぜ、早く上がって来いよ。

まっ、俺も上に行くけどな。」

窓を開けて、ニシシと笑う。

変わった人だ。

ほんの日常。

ト　「ただいま。」

母　「おかえりー、晩御飯は？」

ト　「まだ。風呂に入ってから食べる。」

母　「勝ったの？」

ト　「優勝した。」

母　「車とかついてこない？」

ト　「ゴルフじゃないんだから。」

母　「お父さんの年収超えちゃうかも。」

ト　「それはあるかも。」

父　「・・・・・」

第三話　7（後書き）

突然ですが、更新を停止しようと思います。
忙しくなってしまいました。

アドバイスをくださった皆さん、折角の助言を使うことなく去ることをお許しください。

少しの間、自動更新されますが、先輩の話の後から続かなくなります。

誠に申し訳ありません。

第四話　1

学校か。

これから通うことになる学校は、私立で所謂名門らしい。

名前は、私立海王中学校。

僕はアマチュアには詳しくないんだが、どうやら囲碁の強豪校らしい。

野球とかなら宣伝になるだろうが、碁は宣伝になるんだろうか？

偏差値が高いというのは聞いたことがある。

今日は、初日だ。

クラス発表を見て、そのクラスに向かう。

もうほとんどの人がそろっている。

やはり知っている人はいない。

自己紹介をするらしい。

「片桐トウヤです。

えーっと、たびたび休むかもしれませんが、よろしくお願いします。」

無難に挨拶をする。

「片桐君は、囲碁のプロなんですよね。」

先生、そんなに嬉しそうに言わなくても・・・。

「はい。」

すげー、という声が聞こえる。

碁が有名な学校だから、経験者も多いのだろう。

中一で!?、という声も聞こえるが。

ＬＨＲが終わると、校長室に向かう。

囲碁部について相談があるそうなだ。

もちろん善意のみで了承した。

「待っていました。」

校長は、六十代。

描写は、いらないだろう。

「遅くなって申し訳ありません。」
「いや、かまわんよ。
初日なのだから、学友をつくらねば。」
一人ぼっちは、寂しいからな。
「ありがとうございます。」
「では、さっそくなんだが、塔矢アキラ君を知っているかね？」
「塔矢名人のご子息だと聞いておりますが。」
「うむ。血筋もそうだが、彼は、アマチュアで一番強いと有名でね。
君に頼んでいた囲碁部なんだが、荒れるかもしれない。」
なんだか、面倒そうな気がする。
「指導碁ならともかく、ケンカは知りませんよ。
囲碁部もそれなりに強いんでしょう？」
「だが、学生レベルだ。」
「塔矢アキラは、そんなに強いんですか？」
「別格らしい。

プロ相手に互い先で打っているそうだ。」

「それでどうして欲しいのですか？」

これが大事だ。

「君はプロだ。それに大会にも出られない。

だから、あまり問題にはならないだろう。

だが、彼は違う。

実力はプロ、だが大会参加資格もある。」

「はい。」

「緩衝材になってもらえないだろうか？」

「まぁ、険悪な雰囲気の囲碁部を教えるのは嫌ですが、一年生なので、どこまでできるか分かりませんよ。」

「できる範囲でいい。

部内が荒れて、全国大会に出られないようになることだけは、避けなければ。」

「・・・何故、プロにならないんですかね？」

「ライバルが、大会に出てくるとか・・・。」

誰だよ、ライバル・・・

第四話　2

海王中学校囲碁部。

男女合わせて、何十人もの部員を擁し、全国大会の常連。
同じ地区の中学校は、団体の一角を倒せたなら、まだいい方だと言われる。
顧問は、アマチュアでそれなりに有名だった韓国人を起用し、部員たちは、高い士気をもち日々切磋琢磨している。
らしい。

マンガでは、だいたい悪役をするであろう学校だ。

入学から二週間ほどたった。

大手合いやタイトル戦の説明会や、棋譜の書き方の説明で忙しく、今日になって、やっと予定が空きだした。

今、応接室のようなところにいる。

「片桐トウヤ、初段です。

どうか、よろしくお願いします。」

背が高く、細目の先生だ。落ち着いた服装をしていて、大人らしく、韓国っぽい。

在日かな？

「顧問の尹(ユン)です。此方こそ、よろしくお願いします。」

「部長の岸本薫です。

ご鞭撻、よろしくお願いします。」

クールな雰囲気で、メガネをかけている。この人も背が高い。

イケメンだなぁ。

「じゃあ、打ちましょう、岸本部長。」

「えぇ。では、部室にいきましょう。」

部室に入る前から、中は、ガヤガヤしている。

「厳格な空気でやっていると、聞いたのですが、学生らしくていいですね。」

二人とも、驚いているらしい。

普段は、全然異なるということか。塔矢アキラフィーバーみたいな。

「ハハハ・・・。」

尹先生も苦笑いだ。

ガラガラと、扉が音をたてながら開く。

岸本部長が、先頭で入っていく。それに尹先生と僕がつづく。

「どうした、騒がしいな。」

近くにいた部員に、岸本先輩が聞く。

「・・・青木が負けたんだ、塔矢に。」

尹先生に、青木先輩って誰ですか?、と聞くと、三将だよ、と返ってきた。

つまり、塔矢が、団体から追い出すであろう先輩か。

「どうだった?」

尹先生も気にしていたようだ。

「中押し。かなり早かった。」

青木先輩が弱かったのか、塔矢が強かったのか。

「そうか・・・。

青木は?」

そう言って、周囲をみわたす。

「何も言わずに、出て行ったよ。」

もう一度、岸本部長は、そうか、と言ってから、全部員を集めた。

「今年入学した片桐初段だ。
部活動に参加するわけではないが、時間があるときに指導碁を打ってくださる。」
岸本部長が、紹介してくれる。
「よろしくお願いします。」
ペコッと頭を下げておく。
「今日は、団体メンバーが打つから、他の皆は我慢してくれ。」
先生が纏めてくれたが、青木先輩はどうすんだ？
「青木君の代わりに、塔矢君入って。」
「「「・・・はい。」」」

第四話　3

流石、塔矢アキラと言ったところか。

岸本部長は、部長の一目半勝ち。

副将の先輩（名前を聞きそびれた）は、僕の半目勝ち。

塔矢アキラは、僕の三目半勝ち。

周りは、プロといっても、同い年もしくは年下の僕に、岸本部長が負ける姿をイメージできていなかったのか、驚き半分感嘆半分といった様に、此方を見ている。

一見、強さは、順番のように見えるけど、実際は置石の数が違った。

部長は三子、副将は四子、塔矢は二子。ただし、自分ルールによって僕は半目のコミを貰っている。勝負がつくように。

しかし、これは騒がれるというのも分かる。

倉田五段より、ちょい下ぐらいの棋力。

同じ塔矢門下の芦原三段より、強いかもしれない。

それは、ないか、年上のプライドとして。

「どうですか？」

尹(ユン)先生が気になって聞きに来た。

おそらく、岸本部長たちよりも悪い形で、塔矢君が負けると思っていなかったのだろう。

「流石、名門ですね。

岸本部長は、院生一組の下位ぐらいの実力がありますし、副将の方も部長に及ばないにしても、それなりに強い。

それにしても、流石は、塔矢名人のご子息ですね。

よほど小さい時から、碁に慣れ親しんできたんでしょう。

溢れる才能と惜しまない努力、とても強かったです。

同い年にこれほどの打ち手がいるとは、思いませんでした。」

尹先生は、ふむ、と独り言を呟いてから、目で、順番をつけるならどうしますか？、と尋ねてきた。

「一番は、断トツで塔矢君でしょう。

後は、今までの順番なんじゃないですかね。」

囲碁センスの差もあるが、なにより力強さがある。

家で、名人相手に大事に育てられてきたんだろう。

羨ましい。

検討をして、とりあえず、今日は、お開きとなった。

「片桐先生！」

帰ろうとしたら、塔矢君に捕まった。

「これから、父の経営している碁会所に行くんですが、もう一局お願いできませんか？」

予定は、ないと思う。

ヒカルやアカリと遊ぶのは、明日だし。

「いいけど、条件がある。」

この条件は、重要だ。

「なんでしょう？」

ゴクッと、塔矢君が、唾を飲む音が聞こえる。

「敬語をやめにしないか。

あと、アキラと呼んでいいかな。僕の名前もトウヤなんだ。」

ややこしい限りだ。

「はい、いいですけど。」

承諾を得ることに成功した。いままで、呼び辛かったんだよね。

「って、敬語じゃないか。」

「あっ、すいません。」

・・・・・・・

「「・・・プッ、アハハハハハ！」」

仲良くなった。

第四話　3（後書き）

ＢＬは、ありません。

第四話　4

五月になった。

大手合いだけでなく、王座戦や棋聖戦などのタイトル戦が増えてくる。

王座戦は四月からあるため、既に一回戦は始まっていて、棋聖戦は今月から。

そんなわけで、最近、囲碁部もご無沙汰となっている。

囲碁部でアキラ相手に打ってもいいのだが、僕は本来独りで研究するタイプなんだ。

なので、学校が終わると、すぐに家に帰り、部屋にこもる生活が続いていた。

最近、ヒカルやアカリと会っていない。

囲碁部を立ち上げ、打倒海王を目指すらしいけど、部員が足りないらしい。

・・・大会出場も危うい。

どうするのだろうか・・・。

さて、海王中学校囲碁部で話題の塔矢アキラ君だが、はぶられているらしい。

強すぎるのも問題か。いや、強ければ、強いほどいいに決まっている。

棋士なのだから。

問題は、自分たちが一番だと思っていた王者たる思考。

海王中囲碁部の考え方。

自らの実力に伴わないプライド。

この混乱を纏め上げて、乗り越えることができたなら、校長の言った通り、いい刺激になると思う。

はたして、中学生にそれができるのか。

「失礼します。」

そう言って、部室に入る。

最近、出ていなかったので、自分の居場所がわかりにくい。

取り合えず、後ろのほうの椅子に座り、碁盤と碁石を用意する。

今日は指導碁はなし。

検討会のようなもの（尹先生主催）があるので、それに参加することになっている。

それまで時間があるから、他の部員たちは対局している。

僕も、前の王座戦の棋譜を並べる。

初戦なので、低段者相手だったのだが、途中に試したい手と堅実な手が浮かんだ。

そういう時は、堅実な方を選ぶことに決めていたので、堅実な方にした。

しかし、試したい手、奇策だとどうなったのか、また同じような局面の時、使える戦略として頭に入れておくのかを検討しておきたかった。

パチ、パチと一手目から並べていく。

「検討？」

そう言って、アキラが僕の正面の椅子に座る。

「ああ。この前の自分の棋譜なんだ。」

「黒が片桐だね。」

「どうして？」

「黒のほうが強い。なにより勝利への執念のようなものを感じる。」

「・・・僕が黒だ。」

褒められた後に、言うのが恥ずかしい。

パチンと白石を打ち、問題の箇所になる。

「この場面で、検討？

ここは、もう決まっているだろう。」

そう言って、アキラは黒石を取り、堅実な方の手を打つ。

左下を固めて、さらに中央を寸断を図るいい手ではある。

「打っているときにさ。

ここは、どうだろうって思いついたんだよね。」

そう言って、アキラが打った石を取り、奇策の方の手を打ってみる。

「どう繋がるんだ？」

「ふむ、だけど僕は、さっきの手の方が好きだな。」

分かりやすいしね。

「まぁ、そんなに使う場面はないだろうけど、ちょっと覚えておくぐらいはしておくべきかな。」

検討も終盤。

対局が終わった人たちが、何人か周りに来て、僕たちの話を聞いていたみたいだ。

そのなかの一人が前に出る。

ショートカットのどちらかと言うと運動部のようなスラッとした先輩だった。

自信にあふれていて、可愛いというより、綺麗なタイプ。

確か、女子団体の大将だった気がする。

「お久しぶりです。

日高先輩。」

アキラは、彼女のことを知っているようだ。僕も一応挨拶しておく。

「どうも。」

すると、二カッと笑う。

「こんにちは。ちゃんと話すのは始めてね。

日高よ。

少し話があるんだけど、この後、時間はある？」

なんだろう？

「はい。大丈夫です。」

第四話　４（後書き）

変なところで切ります。すいません。

第四話　5

検討会が終わった。さぁ、帰ろう。

「ちょっと、私との約束忘れてる？」

日高先輩に捕まった。

肩がぁ！？

肩がメキメキ鳴ってるんですが・・・。

「・・・いえ、覚えてますよ、もちろん。」

早く手を離して欲しい。体をくねらせて、逃げ出せないかやってみる。

痛い！？

余計に力を込められた。

「ホントに？」

笑顔で誤魔化そう。

「はい、当然じゃないですか。」

笑顔が引きつっているかもしれない。

「そっち、玄関口しかないわよ。」

「すいません。」

「分かればいいのよ。」

そう言って、先輩は、ずんずんと進んでいく。僕が付いていくのは、当たり前のようだ。

ガラガラと音を立てて、ドアを開ける。資料室のようだ。

「話っていうのわね、アキラ君のことなの。」

アキラ・・・、あぁ、可愛い顔してるから。そういうことですか、青春だなぁ。

「僕は、アキラの好みのタイプなんて知りませんよ。」

「バカ、私は年上がタイプよ。

残念だったわね。」

別に残念ではないのですが・・・。

「その顔、イライラするわ。」

「話は何でしょうか？」

「話を逸らしたわね。まあ、いいわ。

アキラ君虐められてるみたいなの。」

そう言って、日高先輩が先日見たという“いじめ”について語りだした。

先輩に別室に呼び出されて、目隠し碁。

しかも二人同時に。

もっとも三人いた内の一人は瞬殺。もう一人の先輩にも勝ち、途中で部屋に入ってきた日高先輩の激励（？）によって、三人目にも圧勝したらしいが。

「それで？

僕にどうしろと？」

僕がそう言うと、日高先輩は驚いたようだった。

「何その態度？

友達でしょ、あなたたち。」

「僕はそのつもりですが。」

「それなら、どうして止めようとしないのよ！」

「アキラがそれを望んでいるからですよ。」

「・・・どういうこと？」

「アキラには宿敵がいるそうです。

彼は僕たちと同年代で、アキラに二回も圧勝したそうです。アキラは、お父さんと打っている様だったと言っていました。

認めたくはないですが、僕より強いらしい。

さらに言っておくと、そのライバルは、今度の中学生大会に団体で出てくる。

だから、アキラは大会に出て、そのライバルと打ちたい。そのためにプロ入りを遅らせているようですね。」

日高先輩は考え込むような顔をしている。

「つまり、絶対に囲碁部からは出て行かないということ？」

「そうですね。わざと自分を劣悪な環境に置いてでも、アキラはその子と打ちたいようです。」

僕もアキラの気持ちはわかる。

「・・・そう、わかったわ。」

もう何も言うことはない、そんな吹っ切れたような顔になった。

「一緒に帰ろう、若き後輩よ。」

ニシシッと悪戯が成功した子供のような笑みを浮かべて、先輩がドアを開いた。

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n2887r/

囲碁る！

2011年10月6日23時37分発行